

## 1. 巷野悟郎研究員による評価と考察

### 1 はじめに

従来の保育所は、保育に欠ける乳幼児を保育するというのが目的で、かなり限定された児童福祉施設であった。今から半世紀以上も前、戦後の混乱した時期に子どもたちの福祉の面から児童福祉法が制定されて、その中の児童福祉施設の一つとして出発したのである。とき移り、昨今は母親の就業がごく当たり前になり、さらに子育てを知らない親の増加などから保育所も様変わりして、地域における子育て支援の拠点として充実されてきたのである。そこで今回の研究の目的も、子育てが移り変わってきているということに対して、これからの保育所のあり方を再構築するためのものである。

家庭保育の補完の一部としての保育所が、現在では一般的な子育て支援の拠点としての在り方を求められている時代である。

本研究に当たって、研究実施保育園の人達から保育活動の実態が寄せられていて、夫々これからの保育園の在り方が示されて貴重である。そこで私は調査結果を参考としながらこういうことはどうだろうか、こういうことをして欲しい、そして将来に向けてさらに充実した保育所を目指すために、どのような努力が必要かなどということを取り上げてみた。

保育所は乳幼児の保育という人間のもっとも根幹的な内容を包含した仕事であるから、理想とすることは限らない。そこで昨今子育てで問題になっているようなところを取り上げて、その解決に保育所がどのように活動したらよいか考察したい。

## 2 保育所の活動

### (i) 保育所にて

#### 園庭の開放

保育園児の生活の場として保育所には園庭がある。都会地では密集した住宅の中にあるので、園庭はその地区の住民にとってもゆとりの風景である。と同時に子どもの声が騒音として問題になることもある。しかしこの園庭が街の住民にとっても新しい生命を感じさせる場であって欲しい。

そこで住民にとっても在宅で育児をしている人たちにとっても、園庭が一つの風物詩として街中に明るさをもたらしてくれるようなことを演出していただけたら、どんなにか住民と保育所の心が通うことであろう。近年は危険防止ということから、保育所の庭も一般の生活から隔離されていることがある。それは止むを得ないことであるにしても、街との調和でその点をおぎなうことも大切ではなかろうか。園庭が何かの形で住民と密接にかかわれる場で、殊に在宅の子どもたちにとって、楽しい場であればと思う。

すでに実施している園もあると思うが、保育園は何をしているのか、園庭の開放などを機会に、園の生活を近隣の人たちに知っていただければ、保育所に対する親しみも増すであろう。

#### 保育園と嘱託医

各園に嘱託医がいるが、意外と保育所とのふれ合いが少ない。調査によると、年2回の健診というのがもっとも多い、しかし保育指針には嘱託医に相談する、嘱託医の指示を受けるなどの項

目が 25 箇所あることから、嘱託医との関係を密にすることが大切である。その関係も普段からの交流があればこそ、いざというときに力になってくれるであろう。それには保育所職員と嘱託医とのふれ合いの機会を多く持つことである。一年を通じて保育所での行事は多い。嘱託医に参加案内をすることである。誕生会・節句・七夕・クリスマス・職員の懇親会等々よい機会である。それらのときのふれ合いがお互いの気持ちを融和させて、日常の業務のなかで、嘱託医の協力を得られることが多くなる。

### **卒園児同窓会**

実施している園が多いと思うが、卒園児にとって自分が生活した保育所の思い出は多い。そうかといってそう簡単に訪れることもできないから、保育所からの案内状には感激するのではないだろうか。子どもたちは楽しかったことを心にためながら、成長していく。思春期から大人になっても保育所時代が心の片隅に残っていればこそ、いつでも童心にかえって大人社会を明るくし、生活の中に子どもが存在する世の中になるのではないだろうか。

少子時代ではあるけれど子どもの頃を振り返ってみることで、世の中は大人だけではないということを感じることから、それが少子時代を乗り切っていく大きな力となるのではなかろうか。普通だった保育所からの一通の案内状が、きつとおとな達には一服の清涼剤になるに違いない。

### **お年寄りの参加**

近年お年寄りの施設と保育所とを併設というところがある。子どもと年寄りとは共通のところがあるようで、お互いの生活に夫々プラスになることが多い。一つの保育所だけでは、お年寄りと交流する時と場を持つのは難しいことではあるけれど、お互いの訪問ということもあるし、夫々の地域単位で考えれば実行は可能であろう。老人と子どもは何時の時代でも人々にほほえましい風景であり、老人には子どもたちの生命の力と明るさを感じさせ、子どもたちには老人のやさしさや尊厳を感じさせるであろう。長寿の世の中ではあるけれど、お年寄りに触れることのない子どもは随分と多いのではないだろうか。乳幼児期に、お年寄りと肌で触れ合う機会を持たせてあげたいと思う。

### **小中高生の参加**

少子時代では中高生になっても、それまで乳幼児に接したことのある子どもは少ない。それまでは夫々が同年代の友達と一緒に大きくなっていていっただけである。そして自分たちの子どもの頃を忘れ去りながら年を経ていっている。それでもきょうだいがいれば自分より弱い人の存在はわかるけれど、そのような機会もないと、人間同士のふれ合いが未熟のまま成長してしまっている。

近年、中高生が保育に参加しているという学校があって、その成果が報じられている。保育所としてはそのような児童生徒を引き受けるとなると、手のかかることではあるけれど、人数を限定するなどすれば、いくらでも実施可能である。実習を終わった児童生徒の感想文などが、その後の保育にどれだけ役立つことであろう。

保育所は毎日同年代の仲間と接しているけれど、育っていく子どもの立場から考えると、保育士ばかりでなく、多くの人たちのふれ合いが必要である。家庭の育児は母親が中心であるけれど、訪ねてくるお客さんや近隣の人たちのふれ合いもある。保育所が保育する保育士と、保育される子どもだけの環境でなく、児童生徒やお年寄りなど様々な人とのふれ合いの場を考えていく必要

がある。

### 一園一芸

乳幼児は保育所で生活している限り一人ひとりが自由な遊びであり、また年齢が長ずるに及んで友達との関係を学び社会性を身につけていく場である。遊びの中でも音楽や遊びはからだの動きを繊細にして、豊かな情緒を身につけながら、より人間らしく発育していく。子どもの頃の音感覚や筋肉の動きはそのまま記憶として将来まで残っていくという。幼児期に覚えた歌や遊びを大人になっても覚えているのは、その頃の体験が記憶されるからである。あとになってからいつかどこかで聞いたような歌や、子どもとの遊びの中でいつか体験した遊戯が思い出されるのはそのためである。そしてその記憶が若さの力となっていく。

幼児期は環境のあらゆるものに関心を向け、常に新しい発見をしながら経験を積み重ねていくので、その中にみんなで共通の何か一芸を身につけるのも楽しいことではないかと思う。大分県で一村一品の運動が県全体を活性化したと同じように、夫々の園が何か一つのことをみんなで体験していくことも、また楽しい園生活を演出する大きな力となるのではないかと考える。「一園一芸」はどうだろうか。

子どもは自分の行動が楽しいとき、それに没頭する。一方友達の遊びに関心をもったとき、それを自分の遊びとして獲得したい欲望に駆られる。そのようにして遊びが広がり、幅広い関心へと向かいながら成長していくので、その中に何かその園なりの中心を用意してあげると、また集団としての喜びや遊びが、湧き出てくるのではなからうか。できればその園の雰囲気づくりの中心にしてみたら、子どもたちが大人になったときによい思い出となるであろう。一園一芸で家族を巻き込んでみんなで一緒に情操豊かな子どもたちを応援したいと思う。

### 郷土に根付いた文化の伝承を保育に

日本は各地に特徴のある郷土の文化が根付いている。しかしこれも時代とともに社会の平均化の波が文化をうすめてきて、長く根付いていたその土地の文化は消滅してきている。今こそ注目して行動を起こさない限り、私たちは将来に向かって悔いを残してしまう。そこで子どもたちがその土地に愛着を持って育っていくように、夫々の園がその文化を子どもたちを通じて、将来に残していくことができないであろうか。

文化は生活のすべてを包含するので、衣食住のあらゆるものがその対象となる。人とのコミュニケーションに欠かせない言葉も、その土地の生活に根付いたものであるし、子どもたちの昔からの遊びも、その土地の気候風土、そして長い歴史の遺産として評価される。人は生物としてその土地で生まれ育っていく段階で、常にその環境がかかわっているのだから、夫々の園のそれなりの土地の雰囲気を残していきたいと思う。そしてそれは土地の文化を濃縮したものであったらどうかと考える。

土地の伝承を保育園に導入するためには、地元の人たちとの交流も必要であろうし、多くの人々のいろいろな考え方を参考にしなければならない。園での文化の伝承を考えるためには、地域の人との交流なくしては達成できないので、そのことがまた保育園と地域との密着となるであろう。そして子どもたちは大人になっても、いつまでもその園やその土地を思い出さずに違いない。

## (ii) 保育所からの情報

### 感染症情報の発信

入園している子どもたちの感染症の現状は、その土地で生活しているすべての子どもたちの状況を反映していると考えられる。そこで各園ではすでに園児の病気は記録されていることであるが、特に感染症に注視して整理し、地元のマスコミ等を通じて定期的に発信されると、これは乳幼児の感染症情報として役に立つ。

はしかがはやってきたということが分かれば、子どもが機嫌が悪い、熱を出したというようなとき、一応はしかを念頭に浮かべてみるのが、その後の処置に役に立つ。園児を通じて家庭との通信などで連絡がとれていると思われるが、住民の中には園児以外の乳幼児も多いし、また保育所に近いところに住んでいても、離れた施設で保育されている子どもたちもいる。

このような情報は一つの園だけでは実行できないので、少し範囲を広くとって、その地域の中でいくつかの保育園の感染症情報を集める方法もある。そのような方法によれば広くは日本全体の感染症を知ることができる。これが定点観測で、医療の分野ではすでに実行されている。

### 感染症の定点観測

医療の面では全国の第一線で診療している医師の中から特定の人を定めておき、毎日の診療の中で感染症を診断したときに、患者の性と年齢、病名を一週間の終わりにまとめて報告する。その数を都道府県を通じて中央へ集め、統計処理してできるだけ早い時期に各種の医療機関、保健センターなどに還元する。それによって日本全体で感染症の発生の流れ、移り変わりなどが一目で理解されるから、日常の診療の参考となる。

全国 22,000 か所の保育所の中でいくつかの保育所を選定しておき、そこがある特定の書式で決められた感染症を一週ごとに報告し、それを中央でまとめて再び現場に還元することによって、全国の保育所の感染症の状況を把握することができる。このような集計は感染症の予防、早期診断あるいは予防接種の必要性の PR などに大きく貢献する。一人ひとりの乳幼児の健康にかかわるだけではなく、保育所という集団保育の場での感染症への対応で必要なことである。

### 育児情報

保育所では園児の健康や子育ての問題、その季節の注意事項などを印刷物として家庭に配布している。内容は園児の月年齢によって、今の季節ではどのような注意が必要か、今このような子育て上の問題がある。あるいは家庭で注意事項として、例えば早寝早起きの必要性など内容は様々である。

そこで園児ばかりでなく、その地域で在宅保育されている赤ちゃんのためにもそのような育児情報を届けることはできないであろうか。その地域でのそのときのもっとも身近な育児情報だから、これほど適切なものはない。しかし実際にはどこで赤ちゃんが生まれたかわからないので、それについてはその地域での広報誌や新聞などに記事を載せていただき、〇〇保育園でこのようなものを定期的に育児情報として提供している、希望者には有料で郵送するか、また保育所で配布するというのはいかがであろう。

月刊の育児誌や育児書が多いが、子育ては普段の私たちの生活の中にあるのだから、その地

域によってまた季節によっていろいろと注意しなければならないことがある。またその地域でなければできないこと、あるいはその地域での子育ての行事と子育てに関係することなどが具体的に示されるであろう。日常の家庭との連絡事項を在宅保育しているお母さん方にも開示されたら、子育て支援も一段と重みを増していくに違いない。

### (iii) 地域の団体との連携

保育所は児童福祉施設として地域に存在し、地域住民の中の乳幼児をお預かりして保育するのが目的である。そのために専門職としての保育士がかかわって日夜保育するのが業務内容である。保育所側から考えれば育ていく乳幼児の保育が専門職によって無事に保育されれば、それが一日の業務として目的を達するけれど、日常業務の中では、例えば感染症の問題、救急医療の問題、予防接種、健康診断、子どもたちと地域住民との関係など、保育所だけではすまされない問題がたくさんある。

また保育所が専門的業務を遂行するためには、普段からの研修があり、ことに救急処置という実務的な研修は、地元の専門機関と連携を持って遂行していかなければならない。こう考えると、保育所そのものの仕事は、そこだけで完結するのではなく、地元の様々な機関、或いは住民との関わりが多いので、普段からその連携を密にしていなければならない。

身近な問題としては、保育園児の騒音が近隣の住民に及ぼす影響もあろう。乳幼児の散歩や登園や帰宅時に地域と関わることもあろう。そこで家庭であれば隣近所との付き合いというようなことまで含めて、保育所では普段から地域の諸団体との密接な連携をとると同時に、地域住民とのお互いのお付き合いなどまで含めて、心のふれ合いを保っていくようにしたい。

地域によっては、保育所の規模や利用によって連携する機関も限られるであろう。しかしできるだけ幅広い対象との連携をとっていきたい。

### 医師会

医師が活動するために、日本医師会という医師の集まりがある。そしてそれを構成する都道府県医師会があり、さらに市区町村を単位としての医師会がある。同じ町や区でも規模の大きいときには必ずしも一つではなく、同じ市区町村の中でも幾つかの医師会が分かれて存在していることがある。市区町村の医師会はまた、いくつかのブロックに分かれていて、それが最小単位として機能を果たしていることもある。

保育所は健康な乳幼児を対象としている限り、医師会との直接の関わりは少ないけれど、近年の傾向からみると軽度の病気のと看や、病気が治ったけれどまだ集団保育が不適という状態、或いはまだ薬を続けて飲んでいなければならないというような場合など、投薬や医療にかかわるような乳幼児を預からなければならないことがある。この場合特に薬を飲ませるか、或いは吸入や浣腸などの依頼などのことがある。

保育所に看護師が常駐していれば主治医との関係で保育所としてどうしたらよいか考えることができるけれど、看護職が常駐していないときは、保育士が判断しなければならないから、保護者と保育園の間でいろいろとトラブルを起こすことがある。そして解決しようとするけれど、実際には

難しい。このような場合は保育園と主治医との関係であり、夫々の子どもの主治医は、地元の医師会との関係ということになる。そこでこのような問題を解決するためには、地元の医師会との話し合いがある。保育園で医療の問題についていろいろ困っている具体的な内容を挙げ、医師会の担当の医師と話し合い、どのようにしたらよいかの解決策を求めることである。

そのためには、保育園と医師会と普段からの密な関係を持っていることが必要になる。保育所の側としても夫々の保育所と医師会との関係でなく、保育所の方も地域の保育所が一つの団体として機能を果たしているから、地域の保育所団体と地元の医師会との話し合いということになる。夫々の保育所には嘱託医が存在するから、嘱託医を通じて医師会との連携を深めるとよい。

また地域によっては行政上のいろいろな委員会がある。たとえば警察や保健所などの専門委員会など職場の代表で構成することがある。そのようなとき保育所としても積極的にそのような委員会に参加したい。保育所長はいつも前向きでそのような外部の委員会に加わるようにしていくと、委員の中に医師会の代表が加わっていることもあるから、医師会とも触れ合う機会が多くなる。やがて打ち解けてくると、保育所側の考え方が医師会に浸透しやすくなる。

現にその地域での保育所団体の代表が、地元の医師会と親しく触れ合うことによって、保育所現場での医療問題をスムーズに解決している例がある。

#### **その他の団体**

感染症発生の場合には保育所としてどのような体制を整えたらよいか、地元の保健所の力を借りなければならないことがある。

事故や救急医療を必要とするときには、地元の救急病院の力が必要である。

日常の保育の場合でも騒音や交通などで地元住民との関係を無視することはできないであろう。町内会や商店街の人たちとの普段からの交流も必要である。

以上のような機関との普段からの密な連携が日常の保育の自信となり、よりよい保育を推進していくことができる。そして保育所が地元の人たちと、そして機関としっかりと連携をとっているということが、保護者や地域住民からの信頼ともなる。

子どもの育ちは保育所だけの問題ではない。日常の生活の場の中で子どもの心やからだが育っていくということを考えたとき、保育所自体が地域社会の中の存在として考えていかなければならない。

#### **(iv)在宅育児を支援**

##### **一時保育**

保育所は入所（園）児の保育を目的としているので、地域の子育て支援ということを考えてとき、家庭で子育てをしている親を支援するには最適の施設である。近年家庭の母親が、あるとき急に子育てから離れなければならないとき、保育所はその代わりをするという「一時保育」制度がある。家族の病気、冠婚葬祭、母親の休養その他もろもろの理由で子どもを一時的に保育所が預かる。そして全国でその制度が普及し実施されているが、あるとき突然集団保育のなかに乳幼児が加わるということについては、いろいろの問題がある。

一般に保育所入所するときには、慣らし保育が行われて徐々に集団に加わっていくという自然の形をとっているが、一時保育では予定なしにあるとき親から離れて預かるわけであるから、子どもの立場にしてみると、環境の変化や集団に馴染めないということがある。また医学的にみても、感染症の潜伏期であるかもしれない子どもが集団の中に入ったとき、感染させる危険がある。更に家庭と生活内容が異なった保育に順応できないまま、ある時間を過ぎなければならない。

一時保育は、保護者にとって好都合な制度であるが、子どもの立場で考えたとき、検討しなければならない事項が多い。日本保育園保健協議会は、会員を対象に一時保育についてのアンケート調査を行った。その結果を要約すると次のようである。

回答を寄せられた数は 42 名で、看護師 22 名で、その他医師、保育士等である。

一時保育は普通保育と異なるから、そのときの健康状態のチェックが必要であるが、通常の入所と同じ手続きを行うものは回答数の 33.33%である。医師の診断書や母子手帳、そのときの健康状態や健康歴を証明する書類を求めるのが 27.8%。保護者から健康状態を聴取だけで、あまり厳しくないとするものが回答数の 38.9%であった。

健康状態を証明する書類が必要が 24%。感染性疾患をもつもの以外は受けるというのは 33.3%であった。

一時保育を受け入れることによってトラブルの経験のあったものは回答数 70 名に対して 13 件 (18.6%)で、その内容は食事に関するものがもっとも多く、園の食事に馴染めない、食物アレルギーに関するものが中心であった。また施設の方針と保護者の考え方との隔たりによるトラブル、突然の集団参加による親子分離の困難な事例などもあった。その他一時保育であっても、家庭との関係が十分にとれていない場合の問題、あるいは一時保育中の発病、事故なども、普段の様子がわからないだけに責任の問題などもある。

一時保育は保護者には便利な制度ではあるが、預けられる子どもの立場にたつときの問題を整理し、検討しておかなければならない (保育と保健 : 9 巻 7 号・平成 15 年 1 月・53~54)。

### **園児と在宅児の交流**

子どもが育っていく段階では、同年齢の子どもとのふれあいが必要である。生後 3~4 か月頃になると、すでに子ども同士の関心がある。並べて寝かせておくと、お互いに顔を見て手を出し、ふれ合いを楽しむかのような行動をとる。一人歩きが始まり行動が広がると、同年齢の子どもに関心があり、お互いの協調遊びはできないにしても、相手の行動に注目して、ときにおもちゃの取り合いなどをする。3 歳、4 歳になると社会性が出て日常の遊びが子どもの心やからだの発達を目覚しく推進させる。

保育園児は集団生活の場で以上のような環境が用意されているが、在宅児で近所とのふれ合いが少ないと、子どもは母親とのふれ合いで育っていく。母親は子ども中心だから子どもにとっては満足であるが、同年齢の子ども同士の自我のふれ合いの機会が少ない。子育て支援は子育てする保護者を援助するだけでなく、子どもの発達を援助するという考え方からすると、在宅児が園児とのふれ合いの機会を多くするようにしたい。今は各地で子ども達の集まりを作り、同年齢児、異年齢児とのふれ合いの機会をつくっているが、園児の集団が在宅児の子育てに一役担うことは

意義があろう。それは在宅児にとってプラスであるばかりでなく、園児の新しい友だちとして生活の場が広がっていくであろう。ひとり歩きが始めると、生活環境が広がっていく段階での在宅児とのふれ合いは、新しい友達を迎え入れることでもあるから、日常の保育に変化をもたらし、お互いの刺激がプラスに働く。

そのようなとき在宅児の母親と一緒に保育園保育に加われば、わが子を客観的に観察することができるばかりでなく、園児の行動や園児にかかわる保育士の保育などから何かを学んでいくに違いない。それはまた保育士がお母さんから何かを学ぶことができるよい機会でもある。更に第三者が保育に加わることが保育園全体の活性化につながることもあろう。地域の子育て支援は結局は保育所(園)そのものの内容を充実させていくことにもなる。

### 園児と地域のふれ合い

園児はある年齢になると保育所から外に出るお散歩が始まる。安全や子どもの健康、或いは発達の程度などを勘案して、あらかじめ設定された道を歩き休むところなどを考えられているであろう。保育士にとってはたいへん気を使うときであるが、園児にとっては限られた園内と違った開放感があり、地域の生活の雰囲気に触れ合う喜びのときである。お散歩は大人でもそうであるが、地域と触れ合うときであり、天気によって様子も違うし、曜日によっても人通りや触れ合う人が変わる。

このようなとき子どもたちと保育士と、その地域の人たちとの関係はどうなっているのだろうか。保育士はそこに住んでいる人たちと会った時にこやかに挨拶したり、園児が歌を歌ったり声を大きくして跳んでいるとき、地域の住民とのかかわりはどうであろうか。子ども達は道端でいろいろなものを発見したり、仲間との遊びが広がっていくけれど、一方では地域住民の生活の場であるから、そこでの人とのふれ合いを大切にしていきたいものである。

そこで積極的にお散歩を意味づけるためには、あらかじめ散歩道が決まっているのであるから、その道に面した家に「何々保育所(園)の子どもたちが何時頃この道をお散歩でお邪魔します」というような手紙をポストに入れておくというような試みはどうであろうか。もうすでに実行しているところがあるかもしれないが、そのような知らされた家庭ではお散歩を楽しく受け入れて子どもたちを優しい笑顔で迎えるであろう。ときには在宅のお年寄りがその時を心待ちにしているかもしれない。お散歩が地域住民の中の子どもたちがとけ込んでいくよい機会となる。子どもたちもまた従来にも増してお散歩が楽しく待ちどおしいものとなろう。

### (v) 妊娠と保育園

初めての妊娠のとき、妊娠月数がすすむにつれて妊婦は、生まれてからの子育ての心配が生じてくる。今まで赤ちゃんを抱っこしたことのない妊婦が多いから当然のことで、そのために保健所の妊婦教室などでは、赤ちゃんなどを体感させるために、お人形を使ったりしての勉強が行われている。「こどもの城」では毎月赤ちゃんの集まりを「赤ちゃんサロン」という名前で開いている。ここでは生後3か月から1歳半までの乳幼児が70~100人くらい集まるので、そのとき妊婦の参加を歓迎している。毎回数名の妊婦がたくさんの赤ちゃんとお母さんの間に混じって時を過ごし、赤



ちゃんの雰囲気を感じ取り、また赤ちゃんを抱っこさせてもらったり、ついこの間まで妊婦であったお母さんから力強い言葉をかけてもらったりして、楽しいひと時を過ごしている。そしてこれが現在のお腹の中の赤ちゃんをしっかりと感じ取り、そして生まれてからの自信へとつながっていくようである。

保育所によってはすでに普段の保育の中に妊婦さんを交えているところがあるが、いずれも妊婦にとって有意義な経験である。保育士にとっても、ことに若い保育士にとっては、いま目の前にしている赤ちゃんと妊婦さんのお腹の中にある赤ちゃんとが結びついて、子育ての原点である親と子を強く感じるよい機会である。

また妊婦さんが保育へ参加することで、園との親しい関係が生まれるから、産後お母さんが仕事を始めるときに直面する保育所の選択に大きくかかわっていくであろう。赤ちゃんがお腹の中にいるときから続いてその保育園に、ということになったら楽しいと思う。

### 3 保育士の生涯研修について

保育所が設置された当時は、児童福祉法によって保育に欠ける乳幼児を保育所が親に代わって保育することが目的であった。時代の移り変わりと共に、保育に欠けるという理由ばかりでなく、積極的な女性の社会参加のために必要とする保育所という形に移り変わってきた。さらに今日では保育所が地域における子育て支援の中核としての役割も大きくなり、また家庭での子育てを支援するための外に向かったの活動や、育児相談への対応など地域における育児全般の活動へと拡大されてきた。

かつてのような保育所内における限られた乳幼児の保育であるならば、その乳幼児の発育を支援し、病気異常の早期発見や対応という範囲内であったから、地域の住民との対話はほとんどなかったと言ってもよい。しかし地域に開かれた保育所となると、保育している乳幼児ばかりでなく、地域の乳幼児、そして親、さらに関係機関の人たちとのふれ合いが広がってきたので、保育士は常に新しい育児知識や技術、そして社会性を身につけていかなければならなくなった。

家庭での育児を支援するとなれば、今世の中で育児についてどのような問題が提起されているか、またどのような育児が行われているかなど、今日的な育児情報に注意して勉強しておかなければならない。保育所には保育指針があって、保育の基本が示されているから、これに沿って肉付けをしていけばよいが、それは集団保育が基礎になっているから、家庭での一般の育児とは考え方の違うところもある。家庭での子育てを支援するためには、普段の保育所における保育と違った個々の保護者の考え方なども、聞いて判断しなければならないことがある。それがうまく行われるためには、絶えず情報を取り入れて保育士同士の勉強会が必要である。

地域に開かれた保育所の活動を展開していくためには、個々の保育士の日々の研鑽、生涯研修を避けて通ることはできない時代である。それはまた保育所保育と家庭における育児との連携であり、在園児のよりよい保育にも通じることである。